## 30年をふりかえって

元理事 佐藤静夫

昭和48年4月の家畜耐性菌研究会の発足と同時 に、私は小平の農林省家畜衛生試験場本場から岐 阜県関市に新設された鶏病支場に転勤しました。 しかし、本研究会創設の中心メンバーの一人で あった日本獣医畜産大学の高橋 勇先生とは家畜 衛試時代から親交があったので、当初から会員の 一人に加えて頂きました。 高橋先生は日獣大の微 生物学教室に赴任された当時から、わが国でも問 題になりつつあった家畜・家禽由来病原細菌の薬 剤耐性に関する研究を展開しておられました。その 中で家畜・家禽における特有の病原細菌の存在、 また,人とは異なる抗菌剤の種類や使用方法など に注目されました。そこで検査技術の検討も含め てより広く畜産分野における薬剤耐性の研究を展 開するため耐性菌研究会の設立を呼びかけられた ことと存じます。わが国の畜産は昭和30年代半ば から多頭羽集団飼育による効率的な飼育形態が主 流になりつつあり,発育促進や育成率の低下防止 などに抗菌剤が多用される傾向にありました。し かし, 使用当初には著しい効果がみられた薬剤も 次第に効力の低下がみられ,次々と多くの抗菌剤 が導入されていました。その原因として病原菌の 薬剤耐性化が明らかにされ、耐性伝達機構の解明 など薬剤耐性を巡る研究は学会の大きな流れにも なりました。このような背景のなかで設立された 「家畜の耐性菌研究会」には研究所や大学および業 界関係者など多彩な会員の参加が得られました。

爾来,設立を主導された高橋先生の事務局長また理事長としての永年にわたる献身的なご努力による会の運営と役員,会員の協力により,毎年,特色あるテーマにより開催された研究会は盛会で,10周年,20周年と次第にその存在が確立されてゆきました。高橋先生は毎年の研究会におけるシンポジウムのテーマや特別講演の選択には,学

会のみならず業界の情報にも注目され、会員に有益かつ興味あるものをと心がけておられました。しばしば、新年には私や(故)清水 健さんがご自宅に参上して、先生の整理された資料を前にテーマについて額を集めたことも懐かしい思い出です。また、昭和51年には高橋先生が提唱された獣医領域における病原細菌の薬剤感受性試験法の標準化について小委員会が設立されました。動物由来マイコプラズマ、ウレアプラズマなどについては、高橋先生をはじめ山本孝史(東大)、(故)村田昌芳(広島大)、清水高正(宮崎大)など諸先生のご協力を得て実用的な試験方法が設定されました。この小委員会の活動については、当時、鶏病支場から小平の本場へ戻った私もお手伝いし、委員の方々の熱心な論議に参加できたことは幸いでした。

この他にも本研究会との係わりで多くの方々に お世話になりまた交流の機会を得ました。そのお 一人が、会の発足間もない昭和48年9月から10 年以上も理事長を務めて頂いた日本大学の小堀教 授で、多忙な大学のお仕事にも拘わらず毎年、理 事会や総会に参加されました。先生は温厚なお人 柄でしたが大変お元気で、理事会の席では、毎 日, 乾布摩擦で体を鍛えており、車の免許証がと れたので定年退職して暇ができたら車での旅を楽 しみたいと話しておられました。翌年の春の理事 会にも出席されましたが、会議終了後、側にいた 私に「日曜日に植木鉢の移動をしたせいか、肩が 痛むのでレインコートの袖を通すのを手伝って欲 しい」と言われました。そのときは何時に変わら ぬにこやかな先生でしたので、その言葉通りの理 解をしておりました。しかし、その1週間後の4 月初めに開催された総会の席に理事長挨拶の予定 されていた先生の姿が見えず不審に思っていたと

ころ, 高橋事先生から小堀先生が緊急入院された とのことで驚きました。聞けば肺ガンの疑いとの ことで先日のことが思い出され、先生は体の不調 を押して理事会に出席されたことがわかり、大変 申し訳なく存じました。また、そのときが先生の 温顔に接する最後の機会となり、わずか3ヶ月後 の6月初めに先生とは永遠にお別れすることに なってしまいました。小堀先生は細菌学者でお若 い頃は破傷風のトキソイド免疫のお仕事をされて おりました。私も昭和25年頃、家畜衛試の製造 部で同じ仕事に携わっていたので先生の破傷風ト キソイドによる緬羊の母子免疫に関する論文を参 考にしておりました。その頃、偶然に先生が来場 され、破傷風の免疫についてお話を伺うことがで きました。それから約20年以上を経て耐性菌研 究会との関わりで再び先生に親しく接する機会を 得たわけです。

また. 柴田理事長時代に副理事長を務められた 春田先生は、やはり日本大学の教授で食品衛生の 専門家でした。先生は東京都衛生研究所の部長職 を経て大学に移られ、食中毒から食品の衛生管理 の問題まで豊富な経験を生かされて, 幅広い研 究・啓蒙活動を展開されておりました。先生は 飄々とした気さくな方で、私も初対面の時から食 中毒菌の話題などをめぐって気軽に話して頂まし た。また、先生は学会から業界まで幅広い人脈を もたれており、抗菌剤研究会のシンポジウム演者 の依頼や理事会などの会場の借用など再三にわた りお世話頂きました。一方、先生は文筆にも達者 で栄研発行の「モダンメディア」誌に「医学史断 片」と題して医学関係の史跡の訪問記を永年にわ たり連載されて大好評でした。このように元気 だった先生も病魔には勝てず、一旦は講習会の講 師を務められる程に回復され、私もお手伝いしま したが、その後間もなく入院され再び温顔に接す ることは叶いませんでした。

その後も、抗菌剤をめぐる社会的な関心も変遷し、食品の安全性に関する関心の高まりから抗菌剤や農薬等の残留問題が一時期を画するようになりました。このため研究会の活動範囲を薬剤耐性のみならず残留問題と深い関わりのある抗菌剤の適正使用なども含めた幅広いものとすることとな

り昭和58年4月には会の名称が「家畜抗菌剤研究 会 と改められました。これを契機にシンポジウ ムのテーマとして、新たに開発された動物用抗菌 剤に関する報告が選択されるようになりました。 このことは、比較的公表されることの少ない開発 段階のデータを引用可能にしたことで有意義でし た。しかし、次第に動物用抗菌剤の使用規制が強 まる世界的な流れの中で抗菌剤に関する学会発表 の減少、新薬開発の停滞などから研究会活動も低 調化する傾向に危機感が強まりました。このため 会の新たな活動ターゲトとして抗菌剤の使用実績 の高い水産関係の問題にも取り組むことになり平 成4年4月に、会名は「動物用抗菌剤研究会」に 改称されました。このように研究会の対象分野は 家畜から水産まで,また,耐性菌から適正使用と 広がり、各分野との連携強化が図られました。さ らに業界や行政からの要望による「動物用抗菌剤 の臨床試験実施基準試案」の作成、ペット動物に おける抗菌剤の使用実態調査,動物用抗菌剤マ ニュアルの出版など新規事業が立ち上げられ、活 発な活動が続けられています。一方, 1990年代後 半からの人における薬剤耐性菌による院内感染の 多発問題は畜産分野における抗菌剤の使用と耐性 菌発現に転嫁され,薬剤耐性が再び世界的な問題 となっています。最近はWHO をはじめ FAO,OIE など国際機関において耐性菌や動物用抗菌剤の適 正使用の問題に関する国際会議が頻繁に開催され ています。これら会議には当研究会のメンバーも わが国からの委員として参加され、ホットな情報 を伝達して頂き感謝しております。このように創 設30年にして再び研究会の主題が創設当時の薬 剤耐性に回帰したことに感慨深いものがありま す。なお,本研究会の会報ではシンポジウムにお ける質問・討論が掲載されています。これは創刊 当時から高橋先生が会場で、質問者と講演者に用 紙を配布し、その討議内容を記述してもらい録音 テープなども照合して毎年大変なご苦労をかけて 編集されたもので貴重な記録となっています。

以上のように本会は名実共にわが国における動物用抗菌剤問題の検討の場として重要な存在となっていますので、今後とも時機に適したテーマの選択によりさらなる発展を期待したいと存じます。